

N=NICE VIEW(ナニの視線) T=A=ART(アート)&AHOUSE(アハウス) P=L=EVENTURE(イベント)

12年6月号
vol.64

ISSUE(イシュー) VOICE(ボイス) 24枚 PAGE(ページ)

な



発行日 2012年6月1日
 創刊日 2007年1月1日
 発行 株式会社ナイス
 発行人 代表取締役 富田一幸
 印刷 南前山企広
 住・所 大阪市西成区長橋3-6-33
 電話 06-6563-1156
 E-mail info@nice.ne.jp
 HP http://www.nice.ne.jp/

5月連休前に、西成区の鶴見橋商店街となにわ筋の結節点に、サテライト型特別養護老人ホーム「やまゆり」と、都市型賃貸マンション「アジュール・コート」の合築施設が落成し、入居者の募集を開始した。社会福祉法人ヒューマンライツ福祉協会と㈱ナイスの協働事業である。1階には、障害者就労継続支援 A 型でセントラル・キッチン「8(はち)」も営業を始めた。

定礎には、「西成に住み続ける、西成に住み始める」と刻んだ。特養と合築していることから、一人暮らし高齢者でも安心して住み続けられるという意味と、「なび」の既号でも紹介したが、働き始める若い人の、会社の「社」ならぬ、社会の「社宅」になればという意味も込めた。アジュールとは、昔懐かしい言葉だが、「自由区」だ。昨今、自己責任論の立場から「制限付き自由」が流布されているが、都市が持つ「限りなき自由の空間（居場所）」をあえて言いたかった。

セントラル・キッチンは、幾つかの施設の食堂を集合させ、障がい者雇用を創り出すという福祉法人の戦略で、期待される試みだ。福祉法人は、先頃、岸和田市に、水耕栽培の農園も A 型で開設したが、理事長の摺木利幸さんは、開所式の挨拶で、「雇用の場でもユニバーサル・デザインを実現したい」と



西成の「自由区」に住んでみませんか

抱負を語っていたが、障がい者が働く場が、すべての人々にとって働きやすい職場になればという提案だ。法人の職員さんが、ここ2、3年、「農でソーシャル・ファーム」と熱く語っていたが、こんなに早く、二つの施設が開業するとは嬉しいものだ。

その勢いを借りてか？アジュール・コートの1階には、地域のまちづくり計画として、一時は大阪市の構想にも登場しながら、改革なんとやらで店晒したなざらになっている「産業振興施設構想」を、小さくとも市民の手でやってみようという「創業サロン」をまもなく開設する。できたら、靴のまち西成で、若い人の靴の社会的企業が誕生したらと夢見ている。

それにしても、このドキドキはもう何度目だろうか。賃貸住宅事業というのは、入居者が埋まるまで不安でたまらない。昨今は、実感として経済が冷えていると感じていて、あんまり関係ないけど、新聞を見ては、ギリシアは何をしてるんだなどと呟いてしまう。民主党政権には、そんなに驚かなくなってしまったけど。

㈱ナイスは、「西成特区」でいま話題の西成に、住んでみよう、働いてみよう、創業してみようという老若男女を募集中です。

㈱ナイス代表取締役 富田一幸



hidarimakiの
この逸話
AIM ノット ゼア
I'M NOT THERE
I'MNOTTHERE



脚本：トッド・ヘインズ
キャスト：ケイト・ブランシェット
クリスチャン・ペイル
リチャード・ギア
シャルロット・ゲンズブル
ピース・レジャー
製作：2007年米国
カラー作品 136min
DVD発売：株式会社ハピネット

世界の揺らん期に私たちを拘束するあらゆる規範を疑い、新たな規範を築きながら自らの規範をもまた破壊してきたボブ・ディラン。彼は今も僕を誘発する。

『I'M NOT THERE』は、ディランを敬愛してやまないという、究極のディランおたくが作ったような作品で、だからよくある偉人伝や、はたまたサクセスストーリーといった通俗性には背を向けた作品となっている。ディランという人物を素材としたイリュージョン、或いは人物像を自在にいじくって、ディランを玩具にした映画といえるかもしれない。

この作品はまさにディランの伝説と迷宮性を映像化していて、だから、映像や映画としての実験性に興味を持つ人たちや、ディランに通ぎょうし特別関心を持つ人にとっては、一定の理解や興味を得られるかもしれないが、筋立てどおりのストーリー展開を期待する人たちにとっては、理解に苦しむ作品であるかもしれない。

この映画には6人の主人公が現れる。「THIS MACHINE KILLS FASCISTS」と書かれたギターを持つ11才のウディーという黒人少年。自らをアルチュール・ランボーと称する詩人。フォーク歌手であり、教会でゴスペルを歌う牧師。そしてハリウッドで活躍する俳優ロビー。世間の期待にことごとく反逆するロッカー。そして西部開拓史上に名を残すビリー・ザ・キッド。

時代も性格も違う主人公たちが6つのオムニバスで登場する。それぞれがディランであり、ディランというアーティストに影響を及ぼしてきた人物でもある。つまり一人の俳優では演じきれない主役を、6人の俳優がシェアしてディランに迫ろうというのだ。そんな彼らが、ときに時空を超えて絡みあい、融和しあいながら6つの個性がディランという多面的人格を、ときに暗喩的に、ときに戯画的に、あるいはシニカルに表現されてゆく。

映画のストーリーは、ディラン人生の時系列には関係なく、彼の伝説化したエピソードやフィクションを随所にちりばめ、それぞれ6分の1ずつの主人公たちが、ディラン像を分担し演じていくのである。彼の人物像を結論づけ、集約させるのではなく、Blowin' in the wind 一つ「風に舞って漂う」状態（人物像の拡散）、あるいは、I'm not there 一自分の存在を拘束するもの、規定するものから遠くに存在（自由の確保）を、この監督は描きたかったに違いない。

いくつか作品の見所を紹介したい。ウディーと呼ばれる11歳の少年が音楽修行する中、「自分で考え自分の歌を歌う」ことを学ぶ。この少年は明らかにディランに影響を与えたフォーク・シンガーであるウディー・ガスリー（写真1）に重ねたキャラクター

であり、ディランの原点として登場する。

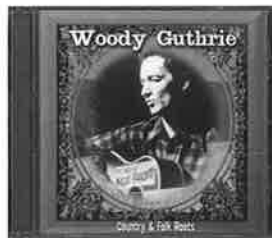
また、ディランそのものであるジュードを演じるのはケイト・ブランシェット。6人の主人公のうち唯一の女性であり、彼女のシーンだけはモノクロームで表現される。65年、ロンドン公演の記者会見で、ディランが記者といさかきをする有名なシーンや、ディランのマネージャーであるアルバート・グロスマンがホテルマンに噛み付くシーン、そしてディランがウォーカー・ブラザーズのアラン・プライスに喧嘩を売る場面など、同年代に発売されたドキュメント VHS『DON'T LOOK BACK』（写真2）で収録されているエピソードを踏襲し、ケイトの中性的キャラクターがディランをデフォルメして官能的だ。また1966年、有名なロイヤル・アルバート・ホールでの『LIKE A ROLLING STONE』を聴衆に大音声で聞かせた事件（これは、同時期発売されたプロテスタントからの決別を意味するアルバム『HIGHWAY 61 REVISITED』（写真3）が先駆けとなっている）や、詩人のアレン・ギンズバーグとの出会い、ビートルズの遠景などが漫画的に挿入され、モノクロ画面の中で躍動していて面白かった。

そして、ベトナム戦争の開戦から終結までの9年間を、俳優ロビーとの破局の9年間であったと回想するクリアを演じるのは『なまいきシャルロット』（85年製作 / 写真4）でデビューしたシャルロット・ゲンズブルで、彼女は今も魅力的だった。

第一線の俳優たちが、ディランという一筋縄では納まらない人物像を演じながら、それぞれのエピソードが無関係につながり、現在と過去のディランが無秩序に遭遇する曼荼羅絵物語といえる。何よりディラン音楽が満載の贅沢な逸遍になっている。

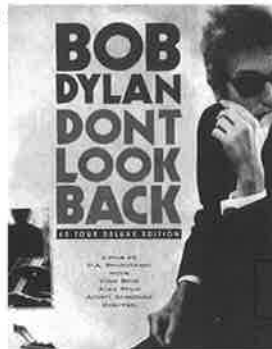
hidarimaki

写真1



Country & Folk Roots
Artist: Woody Guthrie
Release Date: 2003.09.01

写真2



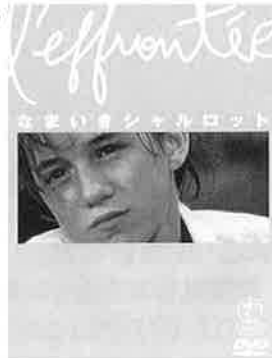
Bob Dylan Dont Look Back
Release Date: 2007.04.30

写真3



Highway 61 Revisited
Artist: Bob Dylan
Release Date: 1965.08.30

写真4



L'EFFRONTÉE
CHARLOTTE AND LULU
IMPUDENT GIRL
Release Date: 1989.04